

『源氏物語』総角巻における千鳥の贈答歌

——常不軽という方法——

磯部一美

一 はじめに

「宇治十帖」総角巻は、大君の薫との結婚拒否、中の君の匂宮との結婚、そして大君の死が語られる、物語の大きな転換点となる巻である。宇治八の宮の一周忌法要の準備に始まるこの巻は、そのわずか三ヶ月後の大君の死までを一気に語りあげてゆくのである。この大君の死という一点をとっても、総角巻が大君論、薫論を展開する上でいかに重要な巻かということは知れるのだが、しかし中の君にとってもこの巻は注目すべき点が多いのではないか。人生の転機となった匂宮との結婚、そして何より大君の死は、中の君上京の大きな契機となったからである。

本稿で取り上げるのは、総角巻の後半、大君が死の床についている、その枕辺でなされた薫と中の君の贈答歌の場面である。ここには、その直前に八の宮が成仏できずに中有を彷徨っているという阿

闍梨の夢語りがあり、ついで供養に常不軽行を行わせている旨が語られる。従来この場面については、「なぜ阿闍梨は常不軽を選んだのか」という点については論じられてきたのだが、^①続く和歌についてはほとんど看過されてきたのであった。^②本稿はそうした中で、常不軽はあくまでこの贈答歌を導くための〈方法〉としてあったのだという立場からの考察を試みたい。結論を先に言ってしまうならば、常不軽は死してなお娘たちへの執着を捨てきれなかった八の宮と、八の宮と共にしか生きられなかった大君を葬り去る（物語から退場させる）ためのものとしてあり、それと同時に語られる贈答歌は、もう一つの「中の君物語」、即ち薫と中の君の物語の端緒となっているということを描きたい。

二 薫の贈歌

まず最初に考察の対象とする本文を掲げておこう。

この常不軽、そのわたりの里々、京まで歩きけるを、a 暁の嵐にbわびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもとにゐて、cいと尊くつく。回向の末つ方の心ばへdいとあはれなり。客人もこなたにすすみたる御心にて、aあはれ忍ばれたまはず。中の宮、切におぼつかなくて、奥の方なる几帳の背後に寄りたまへるけはひを聞きたまひて、あざやかにゐなほりたまひて、「不軽」の声はいかが聞かせたまひつらむ。重々しき道には行はぬことなれど、b尊くこそはべりけれ」とて、

(※薫) c 霜さゆる汀の千鳥 d うちわびてなく音かなしき
e 朝ぼらけかな

言葉のやうに聞こえたまふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答へにくくて、弁してぞ聞こえたまふ。

(※中の君) f あかつきのg霜うちはらひなく千鳥もの思ふ人の心をや知る

似つかはしからぬ御かはりなれど、ゆゑなからず聞こえなす。かやうのはかなしごと、つつまじげなるものから、なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを、今はとて別れなば、いかなる心地せむと思ひまどひたまふ。

〔総角三三〇—三三二頁〕

二重傍線部が語り手の言、傍線部が薫・中の君の思惟である。

この場面ですま注目されるのは、薫の思惟とそれに続く和歌が、地の文と抱き合せて語られていることである。二重傍線部b「わびて」は傍線部d「うちわびて」に、二重傍線部c「いと尊くつく」は傍線部b「尊くこそはべりけれ」に、二重傍線部d「いとあはれなり」は傍線部a「あはれ忍ばれたまはず」に、それぞれ対応している。いずれも語り手の言に呼応するように感慨が語られている。いふ点で、薫はこの場面の状況を語り手と同様に理解・把握し、それと心情を一致していると言ふことができるであろう。薫は中の君に、「霜が凍りつく寒さの中で、汀の千鳥がその寒さに堪えかねて鳴いている、その声がかなく聞こえる夜明け方です」と、同調を求め歌を詠みかける。薫の歌は、例えば『源氏物語提要』には「修行の経を千鳥にとりなしてのうたなり。法めかずして殊勝の歌也」などと評価されているが、「法めかず」「殊勝」とあるのは、そこに教義が踏まえられているという前提に拠るのである。確かに薫の歌は、経を唱える僧の声に触発されての詠出であり、いわゆる釈教歌とはいえるのであるが、しかしここには本当に「殊勝」なほどに教義が込められているのだろうか。

常不軽行は、衆生に「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作仏」という二十四字の偈を唱え礼拝して廻る厳しい忍辱行である。この行は、薫が「重々しき道には行はぬことなれど」と言うように、宮中では行われず、民間信仰としてあったもの

らしい。その由来は、法華經二十八品中の第二十「常不輕菩薩品」にあり、概略は以下の通りである。

昔、威音王如来という仏がいて、説法し涅槃に入った。後にその教えが形骸化しそうな時に、常不輕菩薩があらわれた。菩薩は、会う人ごとに、「あなたはやがて仏になるひとだから、わたしは尊敬します」と礼拝した。人々はかえって腹をたて、石をぶつけ、棒でなぐるなど、この菩薩を迫害した。やがてこの菩薩が命つきようとすると、威音王如来の『法華經』にふれて壽命をのびし、かつて彼を迫害したものに『法華經』を説いて悟りを得させた。常不輕菩薩とは、ほかならぬ釈迦そのひとであり、このように『法華經』を受けたもつことが大切なのである。

衆生を礼拝する理由については、世親の『法華論』に「下不輕菩薩品中示現応知。礼拝讚歎作如是言。我不輕汝。汝等皆当作仏者。示現衆生皆有仏性故」とある。この、「生きとし生ける物は皆、その根底に仏性あるが故に敬う。たとえ人々に瓦石を投げられ、罵られたとしても、それさえも仏縁として、広く衆生を成仏に導く」という常不輕菩薩の行状は、例えば次のような詠歌によっても知ることが出来る。

打罵るもさても種をし植ゑつれば終に御法のむなしからぬを

藤原公任^①

みる人をつねにかるめぬ心こそつひにほとけの身には成りぬれ

『源氏物語』総角巻における千鳥の贈答歌（磯部一美）

赤染衛門^②

不輕大士の構へには逃るる人こそ無かりけれ 誹る縁をも縁として 終には仏に成したまふ 梁塵秘抄^①

不輕大士ぞあはれなる 我深敬汝等と唱へつつ うち罵り悪しき人もみな 救ひて羅漢と成しければ (同)

しかし薫の詠んだそれは、そうした忍辱行に堪え、不撓不屈の精神でもって衆生を成仏へと導く者の姿ではなく、「暁の嵐にわびて」宇治まで戻ってきてしまった僧たちの姿ではなかったか。薫は、「嵐」という逆境に「わび」る「人」としての僧を詠んでいるのである。僧に寄り添う薫の歌は、教義を尊び、そこに心酔している自身の心情を詠んだ、多分に叙情歌的要素が強いものであったと考えるべきであろう。

そして、そうした心情を共有したい相手は、二つ目の波線部「かやうのはかなしごとも（※大君デアレバ）：なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを」にも表出されているように、勿論大君であった。薫が大君を「心を分かち合うことのできる友」として常に求めてきたことは、本文中に繰り返し語られている。

①「：世の常のすぎずきしき筋には思しめし放つべくや。：つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせどころに頼みきこえさせ、また、かく世離れてながめさせたまふらん御心の粉らはしには、さしもおどろかさせたまふばかり聞こえ馴ればべらば、いかに思ふさまにはべらむ」など多くのた

まへば…。〔橋姫一四二頁〕

②「…世の常になよびかなる筋にもあらずや。ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなん…」などと言ひるたまへり。

〔総角三〇頁〕

③「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば…。〔総角三三八頁〕

①は、八の宮不在中に偶然邸を訪れた薫が、姫君たちに交誼を求め語りかける場面。②は、全くうち解けようとしないう大君に痺れを切らした薫が、その理由を弁に問いただす場面。③は、大君のもとに押し入った薫が、実事に至れず夜を過ごしたその夜明け方、大君に語りかける場面である。②と③はその背後に恋情を忍ばせてはいるが、いずれも大君を恋愛の相手としてだけではなく、無常の世を慰め合う友としても求めていることが理解できるであろう。さらに今回もまた同様の心情が反映されているであろうことは、薫が常不軽の声として選び取った「千鳥」からも見てとることができる。千鳥の詠出は、『源氏物語』中には、この場面の他に一例しか見られない。源氏が須磨に退去した際の独詠歌である。

…例のまどろまれぬ暁の空に千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥もろ声に泣くあかつきはひとり寝ざめの床もたのもし
〔須磨二〇九頁〕

千鳥は、歌ことばとしては秋・冬に分類される。またその哀愁を帯びた美しい鳴き声は人々に愛され、古来多くの歌に詠まれてきたのであった。都を遠く離れて異郷の地を流離う源氏は、眠れぬ夜を明かしながら、慕わしい友の声としてこの「千鳥」の鳴き声を聞いている。一方の薫もまた、宇治という異郷の地において、夜明け方に響く常不軽の声に千鳥を重ねて歌を詠出している。異郷の地で孤閨を託ち嘆く源氏の姿は、同じく異郷の地で大君に受け入れられず嘆息する薫の姿と重ね合わせることができるであろう。「千鳥」には、無常の世を慰め合う友として、大君とこそ語り合いたかったという薫の思いが込められているのである。

しかし、実際には薫は中の君に歌を詠みかけたのであった。この場面について玉上琢弥氏は次のように述べる。

常不軽は、「中門のもと」で、拜をする。偈を唱えて。「当ニ仏ト作ルヲ得ベシ」。一切衆生は成仏しうる。八の宮も、姫宮も。そう思わなくては、生から死への関門を、弱い人間はこえられない。…姫宮は何も言わない。薫も、今は、姫宮にむかって何も言えない。

薫は大君には歌を詠みかけなかった。それは、薫がこの時点で既に大君に返歌をもらうことを諦めてしまっているからである。大君をこの世に留め置くことはできない、と薫は本能的に感じている。

大君が死へと傾斜していくこの場面において、初めて交わされる薫と中の君の贈答歌は、今まさに中の君が大君の代替者として薫の心の中に位置付けられようとしていることを示しているのである。

三 中の君の答歌

ではこの贈歌に対する中の君の答歌はどのようなものであったのか。歌意は「霜を払って鳴く千鳥は、私の気持ちを知らないのでしょうか。」である。地の文や贈歌との関連を見ていくと、二重傍線部 a「暁」が、薫の歌では傍線部 e「朝ぼらけ」(ほのぼのと明るくなる頃)となっているのに対して、傍線部 f「あかつき」(夜明け前)に戻されている。また傍線部 cの「霜さゆる」に対しては、まったく逆の意である傍線部 g「霜うちはらひ」で応えており、さらに地の文における薫の問いかけ「不軽の声はいかが聞かせたまひつらむ」には、「もの思ふ人の心をや知る」と明確に応えていない。

一体この歌はどのように解釈すべきなのか。まず、「霜うちはらひ」に着目してみたい。この「霜」と「払ふ」の組み合わせは、和歌では常套表現であるが、「千鳥」詠には類例が見いだせなかった。しかし贈歌の「霜さゆる」と併せて鑑みると、「鴛鴦」を詠んだ歌の中に興味深い例を見いだすことができる。

霜さゆる二見の浦の鴛鴦の上を君よりほかにたれか払はん

小大君¹⁹

『源氏物語』総角巻における千鳥の贈答歌 (磯部一美)

「霜がつめたく凍った二見の浦に棲む鴛鴦の羽の上におく霜を、お妃さま(※宣耀殿女御)以外のどなたが払うことができましょうか」という意である。傍線を施したように、一首中に「さゆる」と「払ふ」の二語が同居している。これを見ると、まず霜は「冴ゆる」(凍りつく)の語であって、それを「払ふ」という順になっていることが分かる。つまり中の君は反発心などから「霜うちはらひ」と表現したのではなく、薫のそれを受け、発展させて詠んでいるということである。また「もの思ふ人」という語も、例えば、

かつ消えて空に乱るる泡雪は物思ふ人の心なりけり 藤原蔭基¹⁸
我がごとく物思ふ人はいにしへも今行末もあらじとぞ思ふ

よみ人しらず¹⁸

などとあるように、恋の情緒を感じさせる歌ことばである。

そもそも、なぜ弁という仲介者が必要であったのかを思い出してみたい。薫に、波線部「つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答へにくくて……」と匂宮を想起する中の君は、薫を必要以上に意識してしまっている。薫を姉の恋人ではなく、異性として意識する中の君は、自らの心的動揺を押し隠すために、弁という介在者を求めたのである。恋歌における女の答歌は、相手の男に対して、その不誠実さを疑い、責め、詰り、躲すというのが常套である。この答歌も、実は薫のことは一つ一つに呼応している。「私の凍てついた心をあなたは癒そうとしてくれるけれど、でもあなたは本当に私の心を理解しているのかしら」と、相手の不誠実さを詰

る歌として読むことも、あるいは可能なのではないか。

勿論この場面は、瀕死の大君を前に常不軽の聲が響いているという状況であり、恋歌としてみるべきではないかもしれない。しかしここには社交辞令というにはあまりには過度な表現が使用されているのであり、見方によっては十分に恋歌とも読めるものとなっているのである。

一方でこの歌は、そうした表層部の読みにとどまるべきではないであろう。『一葉抄』には「これハ不軽の心ハなし」とあるが、そもそも阿闍梨同様に八の宮の夢を見た中の君が、父の成仏を願う常不軽の声を無心に聞いていたとは考えられないことである。

第二節でも述べたが、まだ夜の明けない暁方の霜は、僧たちの心細さそのままに、彼らを苦しめる試験の象徴であった。常不軽菩薩は「何事にも堪え、自らの信念を貫き、衆生を救う」のであるが、僧はその試験に「わびている」のが実態であり、薫の歌はそうした僧の姿を率直に伝えていた。それに対して中の君の詠歌は「あかつきの霜うち払ひ」と、暗闇の中、その試験をうち払う——試験に果敢に立ち向かう千鳥の姿をそこに描いている。中の君の詠む千鳥は、薫の詠む現実的な千鳥（僧の声）とは違い、本来あるべき常不軽の声（八の宮鎮魂の声）なのである。そして、その先に「もの思ふ人の心をや知る」がある。

もの思いにふける人の心を知っているのでしょうか——という表現は大変抽象的である。第一、「もの思ひ」の内容が分からないし、

「人」が誰を指すのかも不明である。先に掲げた『提要』には「此の物思ふ人は中君也」と記されているが、現代に至るまでこれに異論は差し挟まれていないようである。しかしあえてこうした臆化表現を用いていることにこそ注意すべきなのではないか。ここには、本来他者に対して口にすべきではない、憚られることが隠されているのである。

父宮成仏のために修されている常不軽、それは一方で自分たちから父宮を引き離すものでもある。成仏してほしいと思いつつも、しかしまだ中有を彷徨っているのであれば、ぜひ自分たちの前に現れて欲しいと願う心情は、本文には次のように語られていた。

このごろ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ、いかで、おはすらむ所に尋ね参らむ。罪深げなる身どもにてと、後の世をさへ思ひやりたまふ。外国にありけむ香の煙ぞ、いと得まはしく思さるる。

〔総角三二二頁〕

まだ大君が重態に陥る以前、中の君が八の宮の夢を見たことを、大君と語り合う場面である。父宮の元へ迎え取られたい。しかし罪障深い女の身である自分たちにはそれも叶わないであろう。ならばせめて反魂香を手に入れて、父宮を呼び戻したい——中の君はあの大君との記憶を歌に詠み込むことにより、その気持ちを再度分かち合うべく大君に詠みかける。それは、独り父の元へ向かおうとする大君に対して「父宮を呼び寄せたい」と詠むことにより、大君に生きてほしいと願う、中の君からの大君へのメッセージなのである。

薫の歌は、一見中の君に歌を詠みかけながらも、実際はその背後に大君を幻視していた。一方の中の君の歌も、その奥に大君への思いを詠み込んでゐる。両者の歌は、共にその心底に大君を横たえてゐるのである。

四 方法としての常不軽

今まで、薫と中の君の贈答歌が、その向こうに大君を透かし見ていることを確認してきたわけだが、肝心の^⑮大君自身はこれに何も応えてはいない。しかし、死にゆく女君が辞世歌ともいうべき歌を詠出する場面は、既に御法巻に印象的に語られていた。

かばかり隙あるをもうれしと思ひきこえたまへる（※ソウシタ源氏ノ）御気色を見たまふも（※紫の上ハ）心苦しく、つひにいかし思し騒がんと思ふに、あはれなれば、

（紫の上）おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

（源氏）ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を拭ひあへたまはず。宮、

（明石の中宮）秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草

『源氏物語』総角巻における千鳥の贈答歌（磯部一美）

葉のうへとのみ見ん

〔御法五〇四〜五〇五頁〕

周知の通り、紫の上逝去直前の場面である。病床に臥す紫の上の容態は、厳しい夏が過ぎて、過ごしやすい秋がやってきても何の甲斐もなく、ただ衰弱の一端を辿っていた。そんな紫の上の元へ、見舞いのため里下がりしていた養女明石の中宮が、内裏帰参の挨拶に訪れる。起きあがって迎える紫の上に源氏は喜びの色を隠さず、そんな源氏の姿に、紫の上は「これも一時のもの、儂く風に乱れ散る露のように、私の命も消え果てるでしょう」と贈歌とも独詠歌ともつかない歌を詠みかける。これに「私もあなたに後れはしない」と源氏が応じ、さらに明石の中宮が「儂い露の世は他人ごとではない」と続ける。直後、「露」が消え入るように紫の上は命果てたのであった。

最も近い関係にある者たちと歌を交わし、その者たちに看取られて、惜しまれてこの世を去る——という紫の上逝去の場面は、女主人公の死をより劇的に、印象的に彩っていた。宇治の女主人公・大君もまた、恋人（たろうとする）薫と、たった一人の身内である中の君に看取られて亡くなつていこうとする点で、両場面は重ね合わせる事ができるだろう。ただ違うのは、前者では唱和歌であったものが、後者では贈答歌になっているという点である。

なぜ大君は歌を詠まないのか。^⑯その理由を常不軽の中に探ってきたい。

常不軽ということばが『源氏物語』中に表れるのは、最初に掲げ

た贈答歌の場面の二箇所と、その直前に位置する次に掲げた場面の計三箇所のみである。

(※阿闍梨)「いかか今宵はおはしましたらむ」など聞こゆるついでに、故宮の御事など聞こえ出でて……「いかなる所におはしますらむ。さりとも涼しき方にぞと思ひやりたてまつるを、先つころ夢になむ見えおはしましし。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなん、ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなんいと悔しき、すすむるわざせよと、いとさだかに仰せられしを、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえはべらねば、たへたるに従ひて、行ひしはべる法師ばら五、六人して、なにがしの念仏なん仕うまつらせはべる。さては思ひたまへ得たることはべりて、**常不輕**をなむつかせはべる」など申すに、君もいみじう泣きたまふ。(※大君ハ)かの世にさへ妨げきこゆらん罪のほどを、苦しき心地にも、いとど消え入りぬばかりにおぼえたまふ。いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきに参でて、同じ所にもと聞き臥したまへり。

〔総角三三〇—三三二頁〕

今まで大君は、父宮の後世を「罪深かなる底にはよも沈みたまはじ、いづくにもいづくにも、おはすらむ方に迎へたまひてよ」〔総角三三一頁〕と、仮に(子への妄執によって)極楽往生は遂げられなかったとしても、よもや悪道に墜ち入っていることはあるまいと考

えていた。しかし阿闍梨が語った八の宮の姿は、その愛執ゆえに成仏できず、死後一年以上を経てなお中有を彷徨っているという、あまりにも無惨なものであった。阿闍梨はその供養に「なにがしの念仏」を唱えさせ、さらに「常不輕」をつかせているという^②。なぜ阿闍梨が常不輕を選んだのかということについては既に多くの研究者によって興味深い見解が示されているが、本稿の指向するところは、この経の功德の大きさである。

生前、娘たちへの執着によって出家の本願を遂げることが出来なかった八の宮は、それゆえ阿闍梨にとっては常に心配の尽きない仏弟子であった^③。山寺參籠の際に発病、重態に陥っていく中で下山を希望する宮に阿闍梨はそれを許さず、また死してもその遺骸を山からは降ろさなかった。これらはすべて、八の宮が成仏できないことを危惧したからである。しかしそのような配慮も、その後薫によって立派に営まれたであろう法要の数々も、八の宮を成仏させることはできなかったのである。その現実を一番よく知る阿闍梨が、最後の手段として選んだのが常不輕ではなかったか。『今昔物語集』卷十九「僧連円修不輕行救母死苦語第二十八」には、母親の「邪見深クシテ、因果ヲ不知ズ。…惡相ヲ現ジテ、顯ニ惡道ニ墜チヌ」姿を見た息子の蓮円が、その供養のために常不輕行を修して全国各地を廻り歩き、その結果「我罪報重クシテ、此ノ地獄ニ墜テ苦ヲ受ル事量リ無カリツ。而ルニ、汝チ我が為ニ年来不輕ノ行修シ、法華經

ヲ講セルニ依テ、今我レ(※母)地獄ノ苦ヲ免レテタウ利天上ニ生レヌ」と、母を救った話が記されている。また『閑居友』「あづまのかたに不軽拝みける老僧の事」にも、「…すべてこの不軽といふ事は、衆生のむねのそこに仏性のおはしますを、うやまひ拝みたまつる也。我等がやうなる惑ひの凡夫こそ、この事わりをしらねども、悟りのまへにはいかなる蟻、蟻蛄までも思ひくたすべきものなく仏性をそなへて侍也。地獄、餓鬼までもみな仏性なきものはひとりもなければ、この理をしりぬれば、あやしの鳥、けだ物までもたうとからぬ事なし。されば、仏、涅槃にいり給はんとせし時、おほきなる光をはなち給ひて、十万をてらし給ひしに、地獄のそこまでその光いたりて、光の中にこゑありて、「もろもろの衆生にみな仏性あり」ととなへしかば、そのくるしみ、みなのごこりて、天上に生まるとぞ侍るめる」と、あらゆるものを救う尊い経として常不軽が記されている。

大君は「生きとし生けるものは皆救われる」という常不軽の声に静かに耳を傾けた。確実に死へと向う大君には、もはや薫の声も中の君の声も届かない。八の宮を成仏せしめるこの経に、同様に罪障深い(と考える)大君もまた死して救われようとするのである。常不軽は、父宮と共に成仏したいと願う大君の声ならぬ声を代弁しているということができよう。

紫の上にとっての辞世歌が、大君にとっての常不軽であった。常不軽は、大君の心情をそのまま代弁しているのであり、紫の上の歌

『源氏物語』総角巻における千鳥の贈答歌(磯部一美)

と同様の役割を果たしている。常不軽は、贈答歌を導く〈方法〉として物語の中に組み込まれているのである。

五 おわりに

本稿は、常不軽をめぐる一連の場面を、そこに描かれた薫と中の君の贈答歌を中心に考察してきた。

薫の贈答歌は、夜明け方の空に響く尊い常不軽の声に感興を催しての詠出であった。同じ思い(無常観)を共有したいという願いは常に薫の心底にあったのであり、この贈答も本来は大君に詠みかけるべきものであった。しかし薫はそれを中の君に詠みかけた。それは、薫が無意識のうちに大君の生を諦め、その代替者として中の君を求めたためなのである。

一方の中の君は、薫の様子に思わず匂宮を意識してしまふ。弁に代詠をさせたのは、そうした動揺を押し隠すためなのであり、中の君の答歌は、それを反映してか、この場にそぐわない、恋の情緒を感じさせるものとなっている。歌ことばによって導かれた中の君の薫への媚態は、今後の両者の関係を先取りするものとなっていると言えるかもしれない。

しかし一方で中の君の歌は、薫だけでなく大君に向けられてもいた。常不軽の声を叙情的に受け止める薫と、八の宮というたった一人の拠り所を失い、さらに大君までも失おうとしている中の君の心

情は大きく隔たっている。薫によって千鳥によそえられた不軽の声は、父宮を自分たちから引き離してしまう恨めしい声としても中の君の耳に届いていたのである。夢でもいいから父宮に再会したいと切実に願う姉妹の心中を詠んだ中の君の歌は、共に生きて欲しいと願う中の君の、大君へのメッセージでもあったのである。

両者の歌の背景には、大君が幻視されている。その点では、大君は未だこの物語の女主人公たり得ていると言うことができるであろう。しかし、当の大君の心は現世に執着していない。ひたすら常不軽に耳を傾け、父宮と同じ蓮台に乗ることを願う大君は、常不軽に導かれ、この世から、物語から退場していこうとしている。

総角巻は巻頭の八の宮一周忌法要の準備から、大君の死までを一気に語りあげる。「光源氏の物語」の敗者という影を引きずった八の宮と、その影響を強く受けて育ち、八の宮死後もその亡霊に取り憑かれ続けた大君の死は、一つの大きな物語に幕を下ろさせることになる。そうした過去のしがらみを一掃したところで、初めて中の君の上京は達成されようとしている。それは、薫と中の君の物語の第一歩であると同時に、「宇治十帖」の新しい物語を切り拓く第一歩でもあるのだ。

注

(1) 『源氏物語評釈 第十巻』(玉上琢弥著 昭和四十二・十一 角川書店)、清水公照・清水好子「巻頭対談 經典の教理—絢爛たる法華経を中心に—

(1) 大陽仏の美と心シリーズ「絢爛たる經典」昭和五十八・八 平凡社、松本壺至「なぜ常不軽か—『源氏物語』宇治十帖の志向—」(『鈴木弘道教授退任記念国文学論集』昭和六十・三 和泉書院) など。

(2) この場面の和歌を取り立てて扱ったものには「国文学「解釈と鑑賞」別冊源氏物語の鑑賞と基礎知識No.32 総角」(監修・鈴木一雄/編集・後藤祥子・大軒史子 平成十五・十二 至文堂) がある。

(3) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集本(阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳 小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(4) 『源氏物語古注集成第二巻 源氏物語提要』(今川範政著 稲賀敬二編 昭和五十三・十一 桜楓社)

(5) 釈教歌の定義については、例えば山田昭全氏はその論「釈教歌の成立と展開」(『仏教文学講座第四巻 和歌・連歌・俳諧』伊藤博之・今成元昭・山田昭全編集 平成七・九 勉誠社)の中で、①法文歌、②仏教講会の取材した歌、③その他仏教的述懐の三つに区分している。氏の区分によれば薫の歌は③に位置付けることができるであろう。

(6) 神野志隆光「源氏物語の位相 源氏物語の仏教思想の問題点」(『講座日本文学 源氏物語上』監修・市古貞次/編集・秋山虔 昭和五十三・五 至文堂)

(7) 『図説日本仏教の世界③ 法華経の真理』(昭和六十四・一 集英社)

(8) 大正新修大藏経「妙法蓮華経憂波提舍卷下」に拠る。指摘は岩波文庫『法華経下』(坂本幸男・岩本裕訳注 昭和四十二・十二 岩波書店)の解説に拠った。

(9) 新日本古典文学大系『平安私家集』「公任集」(後藤祥子校注 平成六・十二 岩波書店)に拠る。本歌は法華経二十八品和歌中の「不軽品」。なお新大系本に関しては、一部私に表記を改めた箇所がある。

(10) 『新編国歌大観』に拠る。本歌は「法花経の心をよみし」と題する法華經二十八品和歌中の「不軽品」。

(11) 新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』(白田甚五郎、新間進一、外村南都子、徳江元正校注・訳 平成十一・十二 小学館)

(12) 『王朝語辞典』(秋山虔編 平成十一・三 東京大学出版会)、『歌ことば・歌枕大辞典』(久保田淳・馬場あき子編 平成十一・五 角川書店) など。

(13) 注(1)の『源氏物語評釈 第十卷』参照。

(14) 『私家集注釈叢刊1 小大君集注釈』(竹鼻績校注・訳 平成元・六 貴重本刊行会)

(15) 新日本古典文学大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注 平成二・四 岩波書店) 所収。卷八・冬・四七九。

(16) 新日本古典文学大系『拾遺和歌集』(小町谷照彦校注 平成二・一 岩波書店) 所収。十五・恋五・九六五。

(17) 『源氏物語古注集成第九卷 一葉抄』(藤原正存著 井爪康之編 昭和五十九・三 桜楓社)

(18) 倉田実「紫の上の〈辞世の歌〉」(『紫の上造型論』昭和六十三・六 新典社 初出「平安文学研究」77 昭和六十一・五)、「紫の上の死と光源氏―御法巻―」(『源氏物語講座第三卷 光る君の物語』(平成四・五 勉誠社)。氏は、紫の上の最後の詠歌が夫と子との唱和であったことに着目し、「こうして死去することが物語一代限りの女主人公への手向けになったのだ」と述べる。

(19) 井野葉子氏は、その論「大君 歌ことばとのわかれ」(『源氏物語の思维と表現』平成九・二 新典社)の中で、大君が最後に詠んだ薫への答歌について、「…大君はせつかく拒否の表明の歌を詠んだのに、薫には伝わらなかったことになる。歌ことばに託された大君の心は宙に浮いたまま、薫には決して伝わらない。和歌の伝達機能とは所詮そんなものなの

か。これ以降、大君は二度と歌を詠まなくなることは示唆的である」と述べる。

(20) 常不軽行は、会う人ごとに顔ずいて礼拝をするので、常不軽行を修することを「常不軽をつく」という。

(21) 注(1)(6)の他、重松信弘『源氏物語の仏教思想―仏教思想とその文芸的意義の研究』(昭和四十二・八 平楽寺書店) など。

(22) 鈴木裕子「宇治八の宮の「死霊」をめぐって―大君を追いつめたもの、そして阿闍梨の「欲望」―」(日本文学48 平成十・五)

(23) 新編日本古典文学全集『今昔物語集②』(鳥淵和夫、国東文磨、稲垣泰一校注・訳 平成十一・五 小学館)

(24) 『閑居友』(美濃部重克校注 昭和五十四・十二 三弥井書店)。なお、「常不軽菩薩行」を扱った説話の研究については、原田哲通「法華経常不軽菩薩品第二十が生む説話―閑居友上第九話を起点として」(説話文学研究 第十八号 昭和五十八・六)に詳しい。

(25) 鷲山茂雄氏は「宇治十帖主題論 薫と中の君」(『源氏物語主題論』昭和六十二 一稿書房)の中で、「薫がなき姉の代りに自分に心を傾けつつあるのを十分知りながら、夫の不実を拗ねて宇治に籠ろうとするのに、その薫にすがろうとするとはあまりに女としての「甘え」が過ぎるといふものだ。しかし、物語はどうやらこの「甘え」が中の君の最大の魅力であるごとく描いているふしがある。…(※物語ハ中の君ヲ)一見弱々しくも「可愛い女」として描いている。しかし、一方、そうした中の君に読者は実にしたたかな女の姿を見とる必要もあるだろう」と述べる。また斎藤昭子氏も「中の君物語の〈ふり〉―宇治十帖の〈性〉―」(『新物語研究4 源氏物語を〈読む〉』物語研究会編 平成八・十一)の中で、宿木巻における中の君に、匂宮の欲望を模倣し、可愛らしく振る舞う、〈ふり〉をするしたたかな女性としての一面を読み取っている。